



年 組 名前

道新でワークシート

使い方 親子で事前に決めて

子どもの小遣い どう与える

小学校高学年や中学生になると、子どもの活動範囲はぐっと広がり、友人との外出などが増えてくる。お小遣いはどの程度与え、親はどう見守るのが良いのか。大人になった後の金銭感覚にもつながるだけに、親としてもきちんと考えたい。子どもの金銭教育に詳しいCFPファイナンシャルプランナーの横井規子さんに聞いた。

(酒合信子)

定額制がお勧め

まずは、お小遣いを与えるべきかどうか。日銀などでつくる金融広報中央委員会が2016年にまとめた「子どもくらしとお金に関する調査」では、お小遣いをもらっている小学生は約7割、中学生は約8割だった。横井さんは「『つまらない物にお金を使わないか不安』と必要な額をそのつど与える親もいますが、子どもに『やりくり』と『我慢』を学ばせるには、自分で管理させた方がよいでしょう」と定額のお小遣い制を勧める。

実際、ゲーム代や友人との交際費など「必要」として子どもにかけた金額を洗い出すと、相当な額に上る例もあるという。「お小遣い制なら、子ども自身が『今月はちよっとお金が足りないからやめておくと断る理由にもなります』では、どう与えるか。同調査では、お小遣いの月額の中値は小学校低学年と中学生が500円、高学年は千円、中学生は2千円、高校生は5千円だった。ただ、どこまでをお小遣いで賄うかにもよるため「あくまで参考と考えてください」と同委。使い道を見ると、小学生は菓子やおもちゃ、中学生は友人との外食

代などが多かった。

使途振り返りを

貯金箱は、透明な空き瓶など「中身の見える容器が適しています」と横井さん。中身の見えない貯金箱には「いくらたまったかな」と期待する楽しみもあるが、金銭管理を学ぶには、お金ほどの程度あるか[A]的に分かる方が良いでしょう。

使い方のルールは事前に親子で決めておく。「お小遣い帳をつける」「よほどの事情がなければ、追加はしない」「友人との貸し借りや『おごり・おごられ』はしない」など。「コンビニでの買い物は避けてほしい」など、親独自の考えがあればそれも伝えておく。

敗も勉強になる。「よく気が付いたね」とほめてあげると、将来賢い消費行動を取れるようになります」

四つの貯金箱で

小学校低学年や就学前など、早い段階からお小遣いを与える場合は、徐々にステップアップを。「最初は少額を与えて『欲しいもの』を買うことから始め、徐々に文房具など『必要なもの』も含めて、金額を引き上げると良いでしょう」と横井さん。

慣れてきたら[B]的に使うよう促す。「冬休みは友だちとスキーに行くかもしれないね」などと声をかけると効果的だ。

貯金箱は最終的に「欲しいもの」「必要なもの」「貯金」「募金(寄付)」と4種類を用意すると良い。寄付に関しては、横井さんは「私のお金が誰かの役に立つ」と思うと、子どもの目は輝く。社会性を育むことにもつながります」と勧めている。

2017年8月26日朝刊生活面 (記事は再編集しています)

①あなたが「お小遣い制」をお願いするとして、親を納得させられるような理由を、記事を参考に答えなさい。

②記事中の(A) (B)に当てはまる言葉を、次の六つから選びなさい。

自覚 視覚 間接 計画 積極 定期